

みみタロウ

日本語版

83号 2010年8月

滋賀県国際協会 ボランティアグループ「みみタロウ」
大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2F

Tel/Fax : 077-523-5646

E-mail : mimitaro@s-i-a.or.jp

URL : http://www.s-i-a.or.jp

日本には、戦前、朝鮮、韓国から来日し、代々定住している「在日」と呼ばれる多くの人々が住んでいます。今回、みみタロウは、在日3世の弁護士、朴大俊さん（大津市、アクア法律事務所）とお話を伺いました。

苦しい時こそ、前を見る



私の家族は、祖父母の代に、生活の場を求めて朝鮮から来日し、京都に定住しました。私は3世になりますが、一言で在日といっても、社会の変化に伴い、世代によって、日本で生きていく上

での意識が異なるように感じます。まず、1世は、強制連行によって日本に来たという認識が広くありますが、より良い生活を求めて自由意思で来日した方も多く、固い決意の下、がむしゃらに働いて生き抜いた逞しい世代であると考えます。次に、2世は、自分の意思とは関係なく日本に生まれ、理不尽に厳しい差別を受け、それを撥ね退けるために死に物狂いで生きた世代。厳しい差別への反抗心は、全国に民族活動を展開させ、民族教育も盛んに行われました。私の父も、日本の高校卒業後に民族組織に参加し、その一貫として、私や姉も民族学校で教育を受けました。民族学校では、厳しい思想教育がなされ、特に、朝鮮を植民地化した日本への反抗心を養う教育に力が注がれていました。私も、民族教育を受けていた頃には、何の疑問もなく、日本人には負けたくないという感情を持っていて覚えています。

しかし、そんな私に転機が訪れたのは、小学3年生の時です。この頃、意欲的に民族活動を行っていた父に北朝鮮を訪問する機会が訪れました。祖国のために心血注いで活動していた父は、当時、地上の楽園と詠われた祖国への訪問に胸を躍らせていたようです。しかし、理想郷と信じた北朝鮮の現実には、お菓子をねだり群がる子ども達がたくさんいました。父は、自分が信じた組織が、在日の反日感情を上手く利用し、私腹を肥やす団体であったのではないかと失望し、帰国と同時に、すぐに

組織を脱退しました。同時に、私達に、民族学校の思想教育についての有害性を語り、日本の学校に転校するよう手続きを進めました。この時、姉二人は日本の学校に転校したのですが、民族の語学・歴史教育など、民族教育の有益性も大切にしていた父親は、当時3年生で、語学の習得が不十分であった私にだけは、自分のルーツを知ることの大切さを説き、民族学校に残るよう指導しました。この時の父の決断が、まさに、私の転機でした。というのも、そもそも、民族学校というものは、「日本社会への対抗」という大義名分で成り立っている部分もあり、そのため、民族学校から日本社会に学生が流出することを極端に嫌います。小学校での私の立場はととても苦しくなり、私は、学校で孤立して過ごすことになりました。もちろん、友人などは一人もいませんでした。民族学校の教育方針と異なる考えを持つ私は、学校側からすると、邪魔者以外の何者でもないからです。このような環境を理解していた私も、友人など必要ないと感じていました。

このような私に、次の転機が訪れたのは高校1年生の時です。日本の社会で生きていくことを決めていた私は、高校からは日本の学校に通い始めたのですが、すぐに、小中学校時代に友人が出来なかった原因が、決して環境のせいではなく、自分自身の考え方に問題があったということに気がきます。その理由は、高校1年生も終盤に差し掛かる頃に、相変わらず孤立し、一人も友人がいない自分が居たからです。民族学校に通っていた中学までは、自分に友人がいない原因は、親の思想と民族学校の思想が違うからだと思って疑いませんでしたが、そのような社会から抜け出したはずの高校生活でも同じように孤立しているとなると、説明がつかいません。私は、その時に、それまでの自分が、人間関係を、敵か味方でしか判断していなかったということに気付

きました。私が自分で殻を作ってしまったのは、幼少期に、日本人から孤立した仲間であるはずの在日の中において、親の思想と民族組織の思想がズレたために更に孤立するという経験をしたため、自然と、周りはすべて敵であるといった感覚を抱いてしまっていたからでしょう。猛省した私は、自分自身に変化を求めました。敵か味方かという一刀両断的な人間関係を止め、広い人間関係を作る術を身につける工夫を模索します。そこで、人付き合いが上手く、友人も多い人間を観察することで、広く人と付き合い術を身につけようと思いました。今となっては当然で、大した事ではないのですが、人とすれ違った時に笑顔で挨拶し、更に一言添える、ということが大切だったようです。私にとって高校時代は、日本の社会に出たことで、社会には在日自身が感じている程の差別がないこと、むしろ、在日の方が被害者意識を持ちやすく、自ら殻を作っているのではないかということに視点を向け始めた時期でした。

また高校時代は、社会において、いかに自分の個性を生かすべきか、どのように生きていくべきかということを考え始めた時期でした。先にも触れましたが、2世の代は、日本からの差別が厳しく就職先などなかったため、ほとんどが自営業者です。そのような境遇の2世から教育を受けたため、私も幼い頃から、結局企業には就職できないので手に職を持つと決意していました。ただ、そうは言っても、私という個性を社会に認めてもらうには工夫が必要です。そこで考えたのは、広く社会に認められ、効率よく個性を発揮するには、日本の社会に対して、「笑顔で挨拶」することが重要だということです。社会において「笑顔の挨拶」と同じ役割を果たすもの、すなわち、社会に広く信頼されている「資格」を取るべきだ。このように考えた私は、将来の生活の基盤を築くため、税理士になることを決め、同志社大学経済学部に進学しました。しかし、考えるにつれ、せっかく勉強するのであればより高い目標を持つべきだし、社会において最も信頼が厚く、大きな「笑顔の挨拶」として機能する資格を取るべきだと感じ、当時、難関と言われた司法試験を目指すことにしました。大学を卒業してから勉強を始め、早朝の新聞配達をしながら勉強の日々を送り、苦しい時期もありましたが、7年目に合格できた時はとても嬉しかったです。

その後、私は、弁護士として働いていますが、在日の方々と話す機会も多くあります。そこで良く感じるの

は、冒頭でも触れたとおり、一言で在日といっても、世代によって感覚が随分違うということです。私は3世ですが、私が生きてきた中では、多少の差別はあったとしても、2世が受けたような厳しい差別というものはありませんでした。2世が生きた時代から、社会は大きく変わり、むしろ社会は、多様な国籍を個性として受け入れているようにも感じます。しかし一方で、在日社会は、未だ自分たちが不合理な差別を受けている、その不合理な社会は是正されて然るべきだ、という感覚が大勢を占めているように感じます。現実には差別を受けた2世の教育の下、3世以降も、在日を受け入れ始めている社会に目を向けず、自ら「在日」という殻に閉じ籠っているように思うのです。もちろん、在日は、日本において、日本人と全く同じには扱われません。しかし、それは、外国人なので仕方がないことです。日本は日本人のために、自国民を他国民より優先するのはごく自然なことです。私達は、「自らの意思」で日本に在ることを忘れてはいけません。自国民としての権利を求めるならば、自国に帰国するのが一番です。何か不便があったときに、すぐに、「在日は差別されているから」という被害感情を持ってしまうことが、在日社会で生きていく上で、最も不要な意識だと思います。

現実には厳しいこともあります。しかし、目の前で起こったことは、紛れもなく事実であり、いかにしても変えられないのが過去です。過去を憂いたところで、何も生まれません。大切なことは、過去に起こったことは事実として冷静に捉え、そこに、「前向きな評価」を加えて未来に繋げること。「前向きな評価」は、事実と異なり、意識の持ち方でいかようにも変えられるからです。在日は、過去に受けた差別を憂い、社会が変わってくれるのを待ってはいけません。まず、個人個人が在日社会の殻から出て、日本社会で堂々と生きるべきです。そして、日本社会に出た個人が力を高め、大きく活躍することで、日本社会から在日が認められ、結果、日本社会も変わるようになることと確信します。苦しい時こそ前を見て、力強く社会で羽ばたきたいですね。

